

# social work 理論における 役割概念の展開

—R. ラドックを中心にして—

野々山久也

1. はじめに
2. 役割選択と役割間隔
3. 役割取得と螺旋状過程
4. 一時的役割と役割系統樹
5. 役割過程のメカニズム
6. 確認と不確認
7. 役割概念の限界と自己同一性
8. むすびに

## 1. はじめに

かつて H. H. パールマンは、ソーシャル・ケースワークに関して、その「ソーシャル」とはいったい何かを論じ、それが社会的役割の概念によって最も適切に説明されうるとして、ソーシャル・ケースワークにおける役割概念の重要性を強調した<sup>1)</sup>。かの女は、みずからが社会的役割の概念に精通しはじめるとつれて「私はソーシャル・ケースワークの『ソーシャル』という意味への十分な理解とソーシャル・ケースワーカーの専門性に関してのある確固とした意識をもつようになった」と説明し、「ちょうどイド・エゴ・スーパーエゴの3つの概念がわれわれにパーソナリティの構造と機能の多様な

1) H. H. Perlman, "The Role Concept and Social Casework: Some Exploration I, The "Social" in Social Casework," *Social Service Review*, Vol. 35, No. 4, 1961, pp. 370-381.

変化を観察するための枠組を提供してくれるのと同じように、役割の概念もまた社会的機能の多様な変化を観察したり、吟味したりするための枠組を提供してくれる、あるいはその可能性をもっている」と主張した。そして、さらにかの女は「私には、何らかの新しい、または慣れた役割の遂行を引き受けたり、あるいは受け入れたりする場合のその人の障害がソーシャル・ケースワークの活動の場であるように思われる」と結論づけた。

M. E. リッチモンドが『社会的診断』を著した1917年においては、依然としてリッチモンドはもちろんのこと、社会学者や社会心理学者のあいだでも役割概念についての確固たる志向性は見いだされなかった。役割概念が社会科学の学問的俎上にのぼりはじめるのは、およそ1930年代になってからのことである<sup>2)</sup>。したがって、リッチモンドにおける社会的診断であるところの、個人にかかわる社会的環境条件の把握と社会的困難の原因究明のためのあらゆる社会的証拠・資料の収集、すなわち所与のクライアントの社会的状況とパーソナリティについての可能なかぎり正確な理解を得ようとする試みは、他者との人間関係や、社会制度との関係や、文化との関係などをその内容にふくむものとはいえ、またクライアントの社会的側面をことのほか強調するものとはいえ、必ずしも役割概念にもとづく相互作用、あるいは社会的役割そのものにおける社会的診断ではありえなかった<sup>3)</sup>。しかるにパールマンは、その点に関して次のように強調している。すなわち、役割概念にもとづく相互作用に焦点を合わせるとき、診断は社会的診断となるのである、と<sup>4)</sup>。

ところで、J. P. スピーゲルは、すでに役割補足性 (role complementarity)

---

2) G. H. Mead, *Mind, Self, and Society*, University of Chicago Press, 1934.

R. Linton, *The Study of Man*, Appleton-Century, 1936.

3) M. E. Richmond, *Social Diagnosis*, Russell Sage Foundation, 1917.

4) H. H. Perlman, "The Role Concept and Social Casework: Some Exploration II, What is Social Diagnosis?," *Social Service Review*, Vol. 36, No. 1, 1962, pp. 17-31.

の攪乱する理由として5つの条件を提示しているが<sup>5)</sup>、パールマンはこのスピーゲルの分類に触発されて「人が重大な社会的役割を効果的かつ満足に遂行していくことのできないのは、次のひとつ、またはいくつかの理由の絡み合い、あるいはその関連のためである」として、役割遂行における問題発生の8つの条件(すなわち1.手段・資源の不足, 2.知識・準備の不足, 3.身体的・知的能力の不足, 4.危機状況における能力・動機づけの障害, 5.情緒的・性格的障害による能力・動機づけの障害, 6.役割関与者間の役割規定と価値の不一致, 7.同一人の諸役割間の役割規定と価値の不一致, 8.役割規範の社会的価値・定義づけの不一致)を提示し、それらを基準にして、かの女の主張する社会的診断をおこなう方向を示唆しようとしている。そしてパールマンは、役割遂行における問題発生の諸要因をそのように分類することの意義をいくつか指摘しながら、その意義の一つとして「それはケースワーク処遇の出発点が役割問題をもつ人にあるということ、診断の焦点がその人の役割の遂行上において、かれに困難をひき起こしたり、影響を及ぼしたりした要因に置かれるということ、そして診断・処遇上の焦点が役割遂行の回復または改良のために、その人の動機づけ、能力、機会のそれぞれの強化に置かれるということを示唆することである」と論じている<sup>6)</sup>。

パールマンのこのような主張からして、かの女はしばしばケースワーク処遇におけるクライアントのより良い役割遂行の援助がそのままクライアントの同一性を強化することになるという立場に立っているといえるだろう。現にパールマンは、人びとはかれらが現在行なっているものになっていくということや、ケースワーカーは人が現在行なっていることに援助の手をさしおけることによって、その人の現在のあるがままを、そしてその人が感じてい

5) J. P. Spiegel, "The Resolution of Role Conflict within the Family," in N. Bell and E. Vogel (eds.), *A Modern Introduction to the Family*, Free Press, 1960, pp. 361-381, 詳しくは本稿104頁参照のこと。

6) H. H. Perlman, *op. cit.*, 1962, pp. 17-31.

る自分自身を強化させることになると述べている<sup>7)</sup>。確かに、ケースワーカーがクライアントの保持している何らかの自己、換言すれば自己同一性 (self identity) を確認すること (confirmation) ができるような場合、ときに自己のひじょうな増強が観察されるだろう。しかし R. ラドックが指摘するように<sup>8)</sup>、ケースワーク処遇においてクライアントの同一性を強化するということは、現在の役割にあるそのクライアントを確認することを意味する場合もあれば、またそうでない場合もあるだろう。そこで、われわれはパールマンによって採用されている立場がかの女に特有のものであるということ指摘しなければならないだろう。

ソーシャル・ワークの領域において M. R. ゴンバーグが、まず最初に社会的役割の問題をケースワーク活動の焦点であると主唱して以来<sup>9)</sup>、パールマンは他を引き離して最も積極的に役割概念をケースワーク領域において展開させ、かつ体系化させようと努力してきた第一人者である。しかしながら、現時点においてはラドックの理論ほどにその理論的体系化において勝れているものは他には見いだせないだろう。人間理解における幅広い見識を基礎にパールマンらの理論を正当に評価・吸収しつつ、さらに社会的役割をのり越えて実存主義的な接近方法にさえも心を馳せるラドックの理論は、ソーシャル・ワークの領域における従来の役割概念を大きく前進させることに確かな貢献をなすものといえるだろう。そこで以下、この小稿ではラドックの理論における役割概念の展開を概略的に紹介しながら、ソーシャル・ワークにおける役割概念についてのいくつかの考察を試みてみることにしよう。

7) H. H. Perlman, "Identity Problems, Role, and Casework Treatment," *Social Service Review*, Vol. 36, No. 3, 1963, pp. 307-318.

8) R. Ruddock, *Roles and Relationships*, Routledge and K. P., 1969.

9) M. R. Gomberg, "The Specific Nature of Family Casework," in J. Taft(ed.), *A Functional Approach to Family Casework*, University of Pennsylvania Press, 1944, pp. 113-148.

## 2. 役割選択と役割間隔

パールマンをはじめとして、従来ソーシャル・ワークの領域において役割概念を導入して理論展開を試みようとしたほとんどの理論家たちは、主としてクライアントの役割遂行の失敗または障害に着目し、その役割遂行の回復または改良にケースワーク的援助努力の全エネルギーを投入することの重要性を強調してきた<sup>10)</sup>。かれらはケースワーカーがその援助過程をとおしてクライアントの役割遂行を援助することがクライアントの自己同一性の強化につながることになると強調している<sup>11)</sup>。しかしながらパールマン自身も指摘しているように、われわれの現代産業社会は多くの人びとに同一化の基礎となる完全に満足のいくような何らの役割も提供してはいないだろう。たとえば、次のような極めてありふれた人びとを連想してみれば明らかである。ほんの一握りの人びとを除いて、みずからの労働力を売る以外に生きる術のない労働者たち、複雑な官僚制機構のなかでの小さな歯車でしかない労働者たち、また低級な、そして不安定な労働における臨時雇用者たち、定年後の劣悪条件において働く高齢労働者たち、明日のことさえ不安な過疎地域における老人たち、労働不能を理由に生存権さえも否定されかねない障害者たち、そして学歴にのみ期待をかけて子どもの尻をたたき教育ママたち、受験地獄に骨身をけずる子どもたち。こうした人びとにとって役割遂行は、それ自体が極めて自己疎外的であるといわなければならないだろう。したがって、かかる状況でのケースワーカーの援助努力の焦点は、クライアントの役割遂行におかれるのではなく、むしろその役割から自由でありうるような距離、すなわち役割間隔 (role distance) におかれなければならないだろう。ときにワーカーは、クライアントの役割遂行の援助ではなく、クライアントが別の

10) パールマンのほか、たとえば W. W. ベームがその一人として指摘されよう。W. W. Boehm, "The Nature of Social Work," *Social Work*, Vol. 3, No. 2, 1958, pp. 10-18.

11) H. H. Pealman, *op. cit.*, 1963, pp. 307-318.

役割を選択すること、すなわちクライアントの役割選択 (role selection) を援助しなければならないだろう。同一性の強化は、むしろひじょうにしばしばワーカーが現在の役割にあるクライアントを不確認 (disconfirmation) することによって達成されるのである。

ラドックは、その著書の前半においてソーシャル・ワークに利用される役割概念の一般的説明を行なっている。役割選択および役割間隔は、G. H. ミードらの象徴的相互作用論 (symbolic interaction theory) の立場の流れにあるシカゴ学派の社会学者 E. ゴフマンの用語である<sup>12)</sup>。ラドックは、これらの概念を役割葛藤の解決のための一方法として説明しようとしている。ここでラドックのことはをいくらか引用しておくことにしよう。「以上に論じてきたことは、ときにはかれは現在自分がしていること以外のなにか別の価値ある存在であるということ学ぶ必要があるだろうということ、すなわち無益な役割同一化をやめる必要があるだろうということである。その他の例では、かれは役割に同一化することによって改善されることになるだろう。成長の過程とは、しばしば別の役割同一化のために、ある役割同一化をやめることを意味しているのである。」<sup>13)</sup>

さて、E. H. エリクソン流に同一性の概念を発達論的に理解するとすれば<sup>14)</sup>、同一性確立のための不断の過程は個人のライフ・サイクルにもとづく社会的な自己実現 (self realization) の過程にほかならないだろう。してみれば、役割選択および役割間隔は同一性確立としての自己実現の過程における絶対不可欠な本質的要素であるということになるだろう。一般的に言って、われわれの複雑な社会は個人の選択や競争にたいして制限を加えることのないように役割の多様化をじょじょに認めつつある。こうしたことは個人の自

12) E. Goffman, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Co., 1961.

13) R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, p. 110.

14) E. H. Erickson, "The Problem of Ego Identity," in G. S. Klein (ed.), *Psychological Issue*, International University Press, 1959, pp. 101-164.

由とか、あるいは自己実現にとって重要なことであるといえるかもしれない。しかしながら、選択の自由な役割の範囲はもちろん、財産、年齢、性別、風貌、話しぶり、教育などによってひじょうに多様である。換言すれば、極めて制限的である。社会階級はここで作用するところの最も主要な要素であるといえるだろう。

役割選択の可能性の増大は、自己実現にとって不可欠ではあるが、しかしそれはもう一方においてその選択を行なったり、その可能性を確保したりするための保障が必要である。そして、そうした保障は個人にたいして個別的・全体的に対応しうる機能を備えた制度的保障でなければならない<sup>15)</sup>。すなわち、それは従来の社会福祉の単純な政策論にしばしば見いだされるような、たとえ制度的確立をみたとしても、画一的な一括处理的な機能しかもたないような政策的措置であってはならないだろう。元来、社会改良(social reform)を志向するソーシャル・ワークの制度的機能はこうしたところにそのレーゾン・デートルがあっただろう。それは決してただ単にクライアントの規範的・制度的な役割期待にもとづく部分化された単一の役割遂行を援助するといったシステムのパターン維持的な、また社会統制的な目標をかかげるものではなく、むしろ人間優先的な、またシステムのパターン変革的な目標をめざすものであったのである。

もちろんラドックは、必ずしもケースワーク理論におけるこうしたシステム変革的な役割概念の説明を展開しようとしているわけではない。しかしながら、従来往々にして社会統制的とか、体制維持的とか批判されがちであった社会福祉の技術論としてのケースワーク理論に役割概念を導入することがいくらかでも前進であるとするならば、従来どおりにケースワーク処遇の焦点をただ単に役割遂行の援助にあるとするだけではあまりにも平板的にすぎ

15) R. M. McIver, *The Contribution of Sociology to Social Work*, Columbia University Press, 1931.

るといわなければならないだろう<sup>16)</sup>。ラドックは、その点において役割選択および役割間隔なる概念を導入することによって確実に一步前進させようとしているとあって過言ではない。役割概念は、確かに一方において社会構造や社会的地位といった概念と不可分である。しかしながら、われわれはそうした社会構造や社会的地位から離れた役割それ自体の作用または機能的自律性 (functional autonomy) が社会構造や社会的地位に反作用する側面を看過すべきではないだろう。また人間はかれの演じる役割そのものではなく、それ以上であり、それ以外であるという固有の自由を有しているという側面を看過すべきではないだろう。ソーシャル・ワークの領域に役割概念を導入することによって、われわれはただ単に「社会学人間」あるいは「道徳人間」を養成するための片棒をかつぐような、反福祉的誤謬を決して犯してはならないのである。

### 3. 役割取得と螺旋状過程

さて、すでに上述の説明からして理解されるように、本稿において記述されている「役割」の概念はしばしばケースワーカーたちの従来のケース記録に見いだされるような役割概念とはいくらか異なっているだろう。すなわち従来、たとえ役割概念が使用されることがあったにしても、そのケース記録においては往々にして「Aの家族における父親は父親としての役割を果たしてこなかったがために、Aは非行化する結果となってしまった」といった具合に表層的次元での役割概念の展開に留まっていた。本稿においては、たとえばその父親が父親としての役割を遂行してこなかったとしても、何らかの別の役割を遂行していたに違いないのであるから、その別の役割に主として焦点を合わせようとしているのである。表層次元での役割を価値志向的役割

---

16) 従来の心理主義的または精神分析的ケースワーク理論は、ケースワーク理論にたいするこうした批判を回避するためにそれなりの効力を有していた。しかしそれはソーシャル・ワークとしての同一性を放棄する自殺的行為にはかならないだろう。



(value-oriented role) と呼ぶならば、こうした深層次元での役割は動機志向的役割 (motivational-oriented role) と呼ぶことができるだろう<sup>17)</sup>。ケースワーク処遇にとってしばしば重視されなければならない役割は、こうした深層次元での役割なのである。先に引用したラドックのことばのなかに見いだされる役割同一化もこうした次元のものであり、役割選択や役割間隔といった概念についてもかかる次元の配慮を欠如した場合、それらの概念は極めて無味乾燥なものとなってしまいうだろう。

価値志向的役割は規範的な役割であるから、その次元での役割期待は文化的に規定されている。多くの人びとは、そうした役割期待にしたがって役割を遂行することによって自己の社会生活の基本的なニーズ (needs) を充足する。そうした役割期待にしたがって役割を遂行することができなければ、ニーズの充足はありえないということになる。しかし役割に関するこうした見方は、役割の一側面にしか着目していないといえるだろう。ラドックは次のように指摘している。すなわち「役割に必要な諸条件が子どもに課せられる。そして、かれはそれらに順応することを学習しなければならない。しかしながら、このことは物語の半分にはすぎない。他の半分は、かれの演じることのできる、そして他者から受けいれてもらえる役割を見いだしたいとする個人、子ども、または成人の要求に関係している」と<sup>18)</sup>。

役割取得 (role taking) は、規範にしたがって、価値志向的に取得されるだけでなく、個人の精神内界からの動機志向にしたがって意識的ないし無意識的に取得される。動機志向的役割に関する役割取得は、その役割取得への要求が個人の精神内界の深層から生じてきているだけにひじょうにしばしば

17) ただしラドックは、これらの役割を不明確だが、とりあえず第一義的役割および第二義的役割と呼んでいる。R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, p. 11.

18) *Ibid.*, p. 27.

無意識的である<sup>19)</sup>。「Aの家族における父親は父親としての役割を果たしてこなかった」と記録するケースワーカーは、その父親が父親としての規範的な役割<sup>20)</sup>を遂行してこなかったのは、また遂行できなかったのは何故かということの基礎に、かれの深層次元における動機志向にしたがった無意識的な役割取得があったということを記録しなければ、Aの非行化は完全には理解できないだろう。なぜならAの非行化こそ、規範的に期待される価値志向的役割にたいする反役割 (anti-role) としての動機志向的役割の無意識的な役割取得にほかならないからである<sup>21)</sup>。この場合、Aの非行化に関しては価値志向的役割にたいして動機志向的役割が優先的に取得されたことになる。多くの役割遂行または役割取得における役割は、それがたとえ文化的に規定された規範的な役割期待や制度的な役割期待によるものであろうとも、しばしば動機志向的役割であるということができよう。

動機志向的役割における役割取得は、個人の自己像 (self image) と大いに関係がある。他者によって受け入れられる自己像を保持していたいという個人の要求は、ときに死をも恐れぬほど強力である。動機志向的な役割取得は、自己像の保持という目的にしばしばその端を発している。それはときに存在論的安定感 (ontological security) の基礎でさえあるといえるだろう。「多くの常習犯たちは、その選択には恐ろしい刑罰が付いてまわるということをすべて認めていながらも、かれらが自分自身を確認できると感じる唯一の証し的手段として、それらの役割を採用してしまっている」のである<sup>22)</sup>。

19) ラドックは、精神分析的アプローチと役割概念が矛盾するものではなく、むしろ両者の統合がより良い現実理解を可能にするといひ、それをこうした無意識的次元での役割取得に求めている。ラドックは、その一例として不安にたいする「エゴの防衛機制としての役割取得」を論じている。R. Ruddock, *ibid.*, p. 77.

20) たとえば、社会を代表する道徳人間の役割や、教育者としての権威的役割や、また家計を維持するための収入獲得者の役割など。

21) ここでの反役割とは、価値志向的役割における役割期待にたいして対立的ないしは否定的な役割を意味する。これはラドックの用法とは必ずしも一致していない。R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, pp. 35-38.

22) *Ibid.*, p. 9.

個人の演じる動機志向的役割がかれにとっていかに重要であるかを理解しないままの役割概念のソーシャル・ワークへの導入は、害にこそならなくとも大した益にはならないだろう。

ラドックは「以上のような見方は、われわれに社会制度についてのまったく異なった見解を提供するものであることは明らかである。われわれは、たとえば病院組織がただ単に社会的に必要なものであるというだけでなく、それはその職員たちの重要な個人的要求を満足させるところの役割の体系を供給するものであるということに気づくだろう」と指摘している<sup>23)</sup>。すなわち、個人と社会制度との関係は、制度的・規範的に措定された単純なギブ・アンド・テイクの図式的関係ではないということである。われわれはかかる観点に立ってはじめて、「現代人は『典型的な疎外』の状態にあるのである」とか、「人間は、競争的で営利的な、そしてまた官僚的な価値にもとづいた文化からの役割要求を遂行しようとして、なおいっそう自分の人間としての潜在的可能性から、そして他の人びとから疎外していきつつあるのである」とかというラドックの冷徹な指摘を十分に理解することができるといえるだろう<sup>24)</sup>。

動機志向的役割の無意識的取得に関する説明は、たとえ役割という概念そのものを用いていないとしても、他者にたいする基本的動機性向や諸個人がみずからの神経症的要求にしたがって確立しようとする関係のタイプを記述せんと試みた K. ホルナイや E. フロムの精神分析的説明にも見いだされるだろう<sup>25)</sup>。E. バーンも、かれが「潜在的な動機づけをともなったもので、顕在的にはおそらく交互作用 (transaction) の循環的組合せ、すなわち反復である」ところの人生ゲームの理論を展開したとき、同様に動機志向的役割

23) *Ibid.*, p. 33.

24) *Ibid.*, p. 35, p. 40.

25) K. Horney, *Our Inner Conflicts*, Routledge and K. P., 1946. E. Fromm, "Individual and Social Origins of Neurosis," *American Sociological Review*, Vol. 9, No. 4, 1944, pp. 380-384.

の無意識的取得について説明せんとしていた<sup>26)</sup>。

R. D. レインは、複数の人間が相互に他方の無意識的願望を補強しあったり、相互に動機志向的役割の相手になったりしてしまっている状態を螺旋状過程 (spirals) と呼んでいる<sup>27)</sup>。螺旋状過程にある人びとは、何らかの精神的葛藤にたいする防衛として役割を選択しており、かれらは明らかに自分たちの役割を維持するために補足的な役割を演じてくれる相手を必要としており、しばしば他者がその役割に補足するような役割を演じてくれるように強要しようとする。かれらは他者から受け入れられる役割を見いださなければ、そしてそれが長期にわたるとすれば、苦惱、ときには混乱をともなった反応を示すことになる。われわれはしばしばほんとうの「対象喪失」、すなわち真の人間としての相手の喪失よりも、むしろ人生ゲームや螺旋状過程の喪失にたいして絶望的な抵抗を示すものである。このことは社会学と深層心理学、すなわち、役割理論と精神分析理論とを相互に関連づける基本的要素であるといえるだろう。さらに、これこそはソーシャル・ケースワーク処遇における最も基本的要素の一つであると提言することができるだろう。

#### 4. 一時的役割と役割系統樹

社会学においては、諸個人の組合わせとしてでなく、役割の組合わせとしての社会に主として関心をもっている。人間の行動が社会的な用語で説明できるのは、それが役割に支配されているかぎりにおいてである。ところが社会学においては、すべての社会的行動は役割行動とみなすことができるという暗黙ないし公然の前提がある。こうした前提をここで認めるとすると、実は次にひじょうに危念な問題が生じてくる。それは人が社会的に行動することによって種々な役割を次から次へと時々刻々と切り換え、そしてその生

26) E. Berne, *Games People Play*, Andre Deutsch, 1966.

27) R. D. Laing, H. Phillipson, and A. R. Lee, *Interpersonal Perception*, Tavistock Pub., 1966.

活のなかで統合していつている方法に関係している。すなわち、それは次のようないくつかの疑問によって提示されるだろう。人はいかなる意味において役割を変化させることができるのだろうか。また人はいかなる意味において同時に複数の役割を演じることができるのだろうか。そしてそれらは別々の役割として考察することができるのだろうか。もしそうだとすれば、それらはどのように相互に関連しあっているのだろうか。

役割に関する社会学的文献は、こうした問題についてそれほど積極的に究明しようとはしていない<sup>28)</sup>。社会学においては、こうした問題よりもむしろ社会構造の単位としての役割を主として記述しようとしてきている。しかるに、ソーシャル・ワークにおける役割概念の適用ということに関して考察する場合には、個人の役割構造ないしは役割体系についてのイメージを心に浮べることが有用だろう。すでに M. バントンは、個人の役割体系に関する用語として、基礎的役割、一般的役割、および自主的役割という分類を提案してきている<sup>29)</sup>。基礎的役割とは、人の生活様式の大部分を決定するもので、「既婚婦人」などがそれである。一般的役割とは、「大臣の妻」の役割などがそれであって、多くの社会的背景において広範囲に行動に影響を及ぼすものである。自主的役割とは、自由に選択されるものであって、その他の役割に影響を及ぼすようなことはまったくない。たとえば、牧師の妻がいくらかの自由な時間をサボテンの栽培に費やすような場合である。

ラドックは、こうした分類にたいして第4のカテゴリとして一時的役割 (transient role) を提案している<sup>30)</sup>。それは会話のやりとりにおいて、われわれが何かを説明したり、助けを求めたり、注文したり、あるいは冗談をいったりするときに、しばしば刻々と変化させながら採用する役割を意味して

28) コンパートメント化 (compartmentalization) の研究くらいがその例外である。P. E. Slater, "Social Basis of Personality," in N. J. Smelser (ed). *Sociology: An Introduction*, John Wiley Sons, Inc., 1967, pp. 548-600.

29) M. Banton, *Roles*, Tavistock Pub., 1965.

30) R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, pp. 65-66.

いる。ラドックにしたがって、いま個人の役割体系を一本の樹木のように考えて「役割系統樹」(role-tree)として考察するとすれば<sup>31)</sup>、基礎的役割は樹木の本幹に対応するだろう。たとえば、それが中年の男性ならば、かれの一般的役割である夫、父、および児童福祉司などは樹木の主要な枝に対応するだろう。児童相談所における実務や家庭訪問などのような、一般的役割のなかに属する特殊的役割は、第二次的な枝に対応するだろう<sup>32)</sup>。そして一時的役割は、実際に一本の樹木がその外的環境と相互作用する器官である葉に対応するだろう。このことはその樹木が種々な葉、すなわち現実にはまだ知られていない現象を生起させるかもしれないということを仮定するのに好都合である。なおときに一人の男性が児童福祉司として、親として、また夫として、順次に支持的な役割をとるかもしれないという事実は、別々の枝に同じような葉が成長することに対応しているだろう。

役割系統樹は、極めて若い時期における何らかのちょっとした契機から成長しはじめる。ある人は基礎的役割においては確かな成長がみられるが、しかし枝の張り出し状態に問題があり、十分な発達がみられないかもしれない。またある人は片側にしか枝の発達がみられないかもしれない。さらにある人は葉のほとんどない枝によって最少限度の役割でやりとりを維持しているかもしれない。ときに、これ以上申し分のないほどに立派に成長した役割系統樹に出会うこともある。しかし多くの役割系統樹は発達途上の状態にあるといえるだろう。ケースワーカーがこうした立派な役割系統樹を成長させていることは資格条件の一つになるほど望ましいことではあるが、しかし重要なことは、むしろそうした成長を達成しうる潜在的可能性としての高度な自己覚知力 (self-awareness) を有しているかどうかということだろう。

ところで、こうした接近方法はパーソナリティという用語を実質的に無視しているといえるだろう。役割系統樹とパーソナリティとは、はじめは同じ

31) *Ibid.*, pp. 65-68.

32) M. バントンの自主的役割はここに属するだろう。

ものであるかのように理解されるかもしれない。しかしパーソナリティ概念は、経験にたいする過去の順応に由来する要求、願望、および恐怖などからなる布置や構造を包含するものであって、パーソナリティ内部におけるかかる複雑な構造はいかなる役割系統樹にも完全に表現されてしまうようなことは決してありえないだろう。しかしながら、かかる複雑な構造は、概してその人の全体的環境との関係において役割系統樹の成長や形を決定することになる。したがって、役割系統樹は、表面に現われたパーソナリティの産物として、またその表現手段として理解することができるだろう。役割系統樹がパーソナリティという見地から説明されることについては、いかなる制限も存しないのである。むしろ現在のところ、役割系統樹に固有のはずの多くの記述がパーソナリティという標題のもとに包摂されてしまっているのであり、現在にいたるまでアンビバレンスや防衛の概念は、役割理論というよりもむしろパーソナリティ理論の分野に属してしまっているのである<sup>33)</sup>。しかしラドックは、「ときがたつにつれて、役割理論家たちはこれらの価値ある概念をかれら自身の体系に消化させることができるようになるだろう」と指摘している<sup>34)</sup>。

さて、いま役割系統樹を過去のいくつかの役割の集成物、あるいは沈澱物と考えるとすれば、過去の経験についての持続化され、意識化され、そして組織化された中核をさすものとして「自己」という用語が提示されるだろう。定義によれば、自己が他者との関係において活動するようになるやいなや、それは役割行動のなかに包含されるということになる。T. R. サービンのような、いくらかの理論家たちは、われわれの自己が役割のなかに完全に表現されてしまうようなことはありえないことを認めつつ、パーソナリティとは

33) ただしアンビバレンスに関しては、R. K. マートンらが役割理論の領域で再公式化させようとしている。R. K. Merton and E. Barber, "Sociological Ambivalence," in E. A. Tiryakian (ed.), *Sociological Theory, Values, and Sociocultural Change*, Free Press, 1963, pp. 91-120.

34) R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, p. 67.

自己と役割との相互作用から生じる行為の体系であると定義づけている<sup>35)</sup>。さらに T. パーソンズは、子どものパーソナリティ形成の過程である第一次的社会化 (primary socialization) の過程に関する理論の展開を試みるなかで、その過程を子どもが家族内成員間の役割分化をしないで認知し、それをみずからに内面化していく過程として図式化している<sup>36)</sup>。かかる段階にまで理論展開がすすむとすれば、パーソナリティ形成にたいする幼児期経験の効果ということについての S. フロイトによる多くの有益な洞察は、いまのちの役割遂行における幼児期の役割の効果という見地からいいなおすことができるだろう。そして精神分析概念としてわれわれに馴染みの深い固着や退行や投射といった概念については、それに代る役割概念としての役割固着や役割退行や役割投射といった新しい概念が展開されることになるだろう。

### 5. 役割過程のメカニズム

さて、次に論じる役割過程 (role process) とは、従来の不幸なしきたりを打破するためにここで提案される新しい用語である。P. E. スレイターは次のように指摘している<sup>37)</sup>。すなわち「役割理論の領域は、一般に用語上の混乱に悩まされている。……問題の生じる一部の責任は、役割行動を固定化した一対一の連続過程 (sequence) の観点から論じるという不幸なしきたりにある」と。J. P. スピーゲルは、さらに次のように指摘している<sup>38)</sup>。すなわち「社会的役割の概念は、ふたりの人間が相互に適応するさいの二者間の相互作用のみならず、複数の成員がある運動体系によって強いられる特定のタイプの強迫または統制のなかに巻き込まれるときの、かれらの交互作用に

35) T. R. Sarbin, "Role Theory," in G. Lindzey (ed.), *Handbook of Social Psychology*, Addison Wesley, 1954, pp. 223-258.

36) T. Parsons, "Family Structure and the Socialization of the Child," in T. Parsons and R. F. Bales (eds.), *Family, Socialization and Interaction Process*, Routledge and K. P., 1956, pp. 35-131.

37) P. E. Slater, *op. cit.*, 1967, pp. 548-600.

38) J. P. Spiegel, *op. cit.*, 1960, pp. 361-381.



についても説明を容易にしてくれる」と。役割過程という用語は、二者間の相互作用ならびに交互作用のみならず、集団における複数の成員の相互作用ならびに交互作用を全体として説明する場合に、従来のいわゆる役割行動や役割関係などの用語に比して、より有益であるといえるだろう。

役割過程は、論理的には意識的に操作することが可能ではあるが、そのためにはまず役割過程のメカニズムが理解されていなくてはならない。その点に関して、役割過程のメカニズムを明らかにした第一人者であるスピーゲルは、次のように指摘している<sup>39)</sup>。すなわち「行動について生起するものの多くは、ある一人の人間あるいは一群のひとびとの統制のもとに置かれているというようなものではなく、むしろ関係しあっている人びとの認識範囲をこえた複雑な過程の結果である。集団過程そのものにおいて何か誘導機制(steering mechanism)として働き、そして意識的にも無意識的にも誰一人として予期もしない、または望みもしない結果をもたらすのである。あるいはまた誘導機制は、まったく期待しなかった喜ばしい結果をもたらすかもしれない」と。この集団過程を役割という観点からいなおすと、それは役割過程ということになり、そして誘導機制は、いわゆる役割過程のメカニズムということになる。ここでとくに注意しなければならないことは、こうした概念図式にはその準拠枠として均衡・不均衡・再均衡という連続過程の認識が存するということである。

E. F. ヴォーゲルとN. W. ベルは、家族という文脈のなかでの役割過程を通じてパーソナリティが変化することについての極めて興味深い論述を行なっている<sup>40)</sup>。かれらによると、夫婦関係において直接表現されることのない強い緊張をもっている両親は、しばしば無意識的に子どもの一人を問題児という役割に誘導することになり、その問題児としての子どもの行動は直接的に

39) *Ibid.*, p. 362.

40) E. F. Vogel and N. W. Bell, "The Emotionally Disturbed Child as the Family Scapegoat," in N. Bell and E. Vogel(eds.), *op. cit.*, 1960, pp. 382-397.

は両親を悩ますとはいえ、本質的には問題児となってくれることによって間接的に報いられることになるというのである。両親は相互に情緒的に距離をたもち、葛藤の存する諸領域において対決を回避し、子どもを贖罪の山羊(scapegoat)にすることによって、何らかの均衡を維持しているのである。誘導機制は、均衡状態をもたらすことによって全体としての家族にとって良いことであっても、一人の成員にとって悪い結果である場合や、またそれは逆の場合の可能性をはらんでいるのである。

スピーゲルの理論体系における重要な概念は「役割補足性」である。いうまでもなく、この概念もただ単にダイアドのみを説明するものではなく、役割過程一般に適用されるものである。役割過程において度合の高い補足性が維持されているとすれば、それは均衡状態が維持されている場合であって、もし補足性が弱まれば成員間に均衡を取りもどすための役割への再適応の努力が生じることになるだろう。すでに本稿のはじめに記したように、スピーゲルはその補足性の崩壊する理由として、認知的ずれ、目標のずれ、配分方法のずれ、手段的ずれ、そして文化的価値志向のずれ、の5つの条件を提示している。補足性が攪乱することになれば、各々の当事者たちは他者がそれぞれの役割行動を変化させるように要求することになるだろう。かかる役割過程のメカニズムは、スピーゲルにしたがうと<sup>41)</sup>、まず強制とか、甘いことばによる口説きや、それらにたいする反応や応酬としての一時的な評価や、みずからの意図の擬装や、問題全体の延期などによるところの一方から他方への圧力が観察されることになるだろう。こうした役割誘導(role induction)ののちに、次には相手の立場についてのある程度の理解が試みられることになるだろう。この過程はスピーゲルによって役割逆転(role reversal)と呼ばれ、役割誘導の過程と次につづく役割修正(role modification)の過程とを連結する媒介的過程として論じられている。役割修正の過程は、冗談をいっ

41) J. P. Spiegel, *op. cit.*, 1960, pp. 361-381.

たり、第三者への委託を行ったり、新しい解決の確立のために相互に相手の能力をテストしたり、その手がかりを探索したり、たがいに妥協しあったりすることである。そして再均衡化の最終的段階としては、相互にもろもろの報酬の再配分を定着化させるための統合化が観察されることになるだろう。かくして、ここに新しい役割補足性が回復することになる。

ラドックが指摘するように、「スピーゲルの著述は、ソーシャル・ワーカーにとって現在入手できる役割関係の理解のための最も有用な体系的接近方法である。<sup>(42)</sup>」ソーシャル・ワーカーたちにとってスピーゲルの理論体系は、役割遂行におけるクライアントたちの問題がかれら自身の役割演技における補足性の障害によるものか、それとも、かれらの配偶者や子どもたちの補足性の障害によるものか、そしてまたかかる障害が認知的ずれとか、目的のずれとか、役割配分のずれとか、手段的能力のずれとか、または文化的価値のずれとかの、いずれによるものであるのかということを検討するのにひじょうに有益である。そしてさらに、スピーゲルによる役割過程のメカニズムの理論は、ソーシャル・ケースワークの実践活動にとっての真の役割修正ないしは相互適応を導くための足がかりに関してはもちろんのこと、ある人がその人の好みの役割遂行にふさわしい役割を他の人びとに演じさせようと誘導するさいに共通に用いるいくつかの戦略を分類するのにひじょうに有益である。ここまで理論的整備が行なわれることになると、次にわれわれはラドックの理論にしたがって、いよいよケースワーク処遇への役割概念の実践的利用の方法を明らかにすることができるようになるだろう。

## 6. 確認と不確認

ケースワークの実際活動において面接を無視したり、軽視したりすることはケースワークそのものの成立を否定することにほかならない。ケースワークの実際活動における面接は、ときにそれ自体がケースワークであると極論

42) R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, p. 97.

される場合さえありうるだろう。ラドックは、ケースワークの実際活動における全体過程や諸原理・諸技術などについては、それらに関して解説した多くの専門書にゆずり、専らワーカーとクライアントとの会話のやりとりの過程としての面接の過程を役割概念で解説しようとしている。

面接過程の解説には、本稿に述べてきたすべての役割概念が登場することになる。なぜなら面接過程とは、ワーカーとクライアントとの役割過程にほかならないからである。そこには、まず役割過程のメカニズムとしての役割誘導、役割逆転、および役割修正の過程が見いだされるだろう。役割誘導の過程は、クライアントがみずからの役割系統樹における一時的役割をとおしてクライアントからワーカーにたいして試みられるだろう。ワーカーにたいするクライアントの動機志向的役割の次元におけるこうした役割誘導は、それこそワーカーがつぶさに洞察しなければならない面接過程における焦点である。ワーカーは全過程をとおして援助者としての価値志向的役割にもとづいてクライアントにたいして心からの関心や心からの関わり合いを表現することによって、クライアントが抑圧された感情や態度を容易に表現できるように終始、受容的態度を維持していなければならない。ときにクライアントは依存的役割を望んだり、またすべての責任をワーカーの役割に投射しようとしたりするかもしれない。さらにときにクライアントはワーカーを何らかの葛藤における味方としてとりこにしてしまおうと試みるかもしれない。

面接における一時的役割をとおしてクライアントの動機志向的な役割取得を洞察すること、すなわちワーカーにたいするクライアントの役割誘導を洞察することは、会話における言語の意味とともに、表情や身振りや態度などの補助的合図を解釈することを意味している。とくに言語の意味は、ことばの顕在的内容とはまったく反対の意味が、語調、速さ、身振りなどによって表現されているかもしれない。そこでワーカーは「第三の耳で聞く」ことが必要になるだろう。未熟練なワーカーは、クライアントによる役割誘導が十分に洞察できず、クライアントとともにゲームを演じてしまったり、螺旋状過

程に巻き込まれてしまったりすることになる。逆転移 (counter-transference) の過程は、ワーカーとクライアントとのそうした役割過程にほかならないだろう。

ラドックは、面接における会話の流れを早いスピードで球の往来するテニスに類比しつつ、ワーカーとクライアントとの関係をテニスのコーチと新しい弟子との関係に準らえている<sup>(43)</sup>。コーチとその弟子は、まずコートに出てテニスの競技をはじめ。コーチは弟子の打ち方、フットワーク、戦術、さらにスタミナなどについて実地に検査する。これはワーカーによるクライアントの全体的な役割遂行についての究明に相当する。コーチは弟子がバックハンドやスマッシュという点で成長する必要があると判定するかもしれない。コーチはこれらの弱点を摘発し、そしてかれのやり方で弟子を訓練するために自分の球を打ち込もうと試みる。コーチは弟子が自分の欠陥をかくすのに役立つ部分的に効果のあるもう一つの打法を身につけていることに気づくかもしれない。こうした過程は、会話をクライアントの役割問題の方向に支持的に向けながら、クライアントの役割問題や防衛を洞察しつつあるワーカーと一致しているだろう。次の過程では、クライアントも弟子もともに自分たちの弱点を認め、それらの弱点に働きかけようとする援助を受け入れることになるだろう。

面接において時々刻々と採用される一時的役割はテニスにおける多様な打法に相当する。ケースワーク状況ではクライアントは幅広いさまざまな一時的役割を披露し、断言的であろうと依存的であろうと例外なくワーカーに何らかの役割を割り当てようと試みるだろう。すなわち現在の役割に、または演じたいと思っている役割に補足するような役割をワーカーに演じさせようと努力するのである。ワーカーのためにクライアントが用意する役割がクライアントにとって有用であると判断できるような役割であることはめったに

43) *Ibid.*, pp. 92-93.

ない。これらのすべてはワーカーによって結局確認されないままになる、すなわち「不確認」されることになるだろう。しかしワーカーはそれにもかかわらず、クライアントが何らかの価値ある一人の人間であると考えていることを伝えようとするだろう。その結果、クライアントはワーカーにたいしてこうした種類の役割の手がかりを申し出ることをやめることになるだろう。すなわち、かれは自分の一般的なクライアントの役割には多くの行動の自由が許されており、また責任を引き受けることが要求されていることを学習するようになるのである。このことを示唆するためにワーカーは多くの役割の手がかりを提供する。そしてワーカーはクライアントが自分の役割遂行のなかにこれらを確認していくにつれて、それらを「確認」していくことになる。このことはクライアントが順次にワーカーの一般的役割を理解したり、またそれにたいする補足性を確立したりすること、すなわちクライアントの役割逆転や役割修正を助長することになるだろう。

こうしたことのすべては会話における一時的な役割演技の効果についての素早い吟味と一時的役割の演技の入れ替えをとおして生起することになる。N. ティムズは、この点に関して次のように指摘している<sup>(44)</sup>。すなわち「したがって処遇は、種々な役割にたいするワーカーの潜在的反応の問題として最もよく理解することができる」と。そしてまた、かれは処遇にとつての望ましい態度について次のように指摘している。すなわち「クライアントとの相互作用によって示唆される変転的な役割を感知したり、創造したり、拒絶したり、または問いただしたりする準備が整っているということである」と。そして「このことは……一般化された役割を演じるのに比して、処遇の過程がより試験的であり、より複雑であり、またより創造的であるということ」を意味しているだろう。

---

44) N. Timms, *Social Casework*, Routledge and K. P., 1964.

## 7. 役割概念の限界と自己同一性

ソーシャル・ワーカーにとって最も大きな問題は、役割の貧困、すなわちほとんどいかなる葉ももたないような発育不全の役割系統樹を露呈するクライアントである。かれは面接においてほとんど何も言わないし、またいかなる望みも、いかなる考えも表現しない。ワーカーの確認できるものは何もないし、またそのような確認はいかなる場合にも拒否されてしまう。拒否だけがかれの唯一の決定の意思表示である。しかし、こうした拒否はおそらく役割関係にとっての出発点となるものだろう。また強度に強迫的あるいは抑うつ的な人びとは精神医学的処遇が考慮されなければならないだろう。しかしながら、これらの人びとの多くが精神科医の援助よりもむしろソーシャル・ワーカーの援助にたいして、より良く、そしてまたより少ない犠牲において反応するようになるという強い印象の残ることは皮肉である。

役割概念は、すべての社会的行動に適用することができるといっても、もちろんその有効性には限界がある。一時的役割という概念はそれをもってほとんどの社会的交渉を説明することができ、ケースワークにおいて生起するところの確認するか否かといった選択的ならびに補強的過程の意義を正当に評価するものであるが、しかしこれらの過程がさらにより深く理解されるためには、一時的役割の各々がパーソナリティ内部の諸過程との関連において説明されなければならないだろう。すなわち、役割について語ることは行動のほんの一つの側面について語ることにすぎないのである。パーソナリティには、それ自体また多くの種々な見方が存している。そのいくつかの要素は身体内部に存しており、そして他のいくつかは物質的な環境に存している。これらの接近方法のすべては種々な側面を切り離し、そしてそれぞれ一度にその一つだけを考慮するという必然的結果をともなう。このことは切り離して考慮されるすべての過程の中心に位置するところの、経験、願望、および目的をともなった、そしてまた全体的に統合するといった課題をともなった

「人間」を見落としてしまう危険性がある。

人間を必ず経歴をともなった、そしてまた一連の目的に向って努力したり現実化させようとする自分自身の未来への計画を有していたりする全体的存在として考察することはひじょうに重要である。人間はただ単に社会的諸力や、かれの身体的構造や、またかれの過去の経験によってのみ構成されているものとして理解されるべきではない。すなわち、かれは自分にとって開かれた真の選択権や、自分の経験を組織化する種々な方法や、世界についての自分の見解やそれについての自分の価値判断を変える可能性を有しているのである。そこで人間を発展的に統合化していく実体とみる D. G. クーパーとともに、われわれは「人は自分に向けてなされることにたいして、どのように対処しているのだろうか。かれは自分が仕立てられているものについて、どのように考えているのだろうか」と問わなければならないことになるだろう<sup>(45)</sup>。人間理解に関するこのような準拠枠は、ソーシャル・ワーカーにとって基本的なものであることを忘れてはならない。

このような思考方法にとって中心的な概念は、自己同一性という概念である。ワーカーはおそらく精神医学的問題や役割問題をもつ人びとのいくらかの経験から、そのような人びとが自分自身の同一性について保持している支えが何と脆いものかということに気づいているだろう。同一性の感覚は、試験的なものであり、流動的なものであり、また不安定なものである。「これが現在あるがままの私自身である」という意味において選択される同一性は、一時間あるいは一分間のうちに変化してしまうかもしれない。こうしたことから理解されることは、「私」はすべての人が理解してはいるが、しかし誰もとくに改めて吟味したことの無い種々な方法で「私自身」と関わり合うことができるということだろう。ゴフマンは次のように指摘している<sup>(46)</sup>。すなわち「次のことは役割分析についての基本的仮説である。すなわち各個人

45) D. G. Cooper, *Psychiatry and Anti-Psychiatry*, Tavistock Pub., 1967.

46) E. Goffman, *op. cit.*, 1961, p. 90.



は……ひとつ以上の役割を遂行しているということ、したがって各個人はいくつかの自己をもっているということである。」もちろん、ときに不安とか家族の圧力などが人に一つの選択を限定するかもしれない。しかしながら、本質的には誰にでも多くの選択の可能性があるだろう。

クライアントの多くは、特定の自己同一性に執着し、自分自身をある種の人間として固定的に見なしてしまっている。これにたいしてワーカーは、クライアントが別の種類の間人でありうる可能性を見いだす。ワーカーは選択されている同一性を支持しないで、そのままにしておき、クライアントに別の同一性を仮定する機会を与えようとする。クライアントを新しい自己との同一化に向けてそれとなく導いていくことは、しばしばよく知られた抵抗(resistance)を開始させることになるだろう。そうすることの利点や実現可能性がはっきりしているときでさえも、クライアントが新しい別の自己を採用することに反対して示す抵抗は、不安によるものである。そのようなクライアントたちが同一性の基礎としての劣等的または優越的な自己像にたいして保持している、そしてそこから自分たちの役割を演じている強迫的なものは、防衛として理解される。その源は通常、パーソナリティの内部に求められることになるだろう。そこで役割概念の限界性をことさらに強調して、ときに「社会的諸要素は、現実の役割遂行を研究する場合には考慮しえても、その役割を演じるさいの内面的な心の分断化をささえる動機については、パーソナリティの内部に求められなければならない」と主張されることになる。しかしそれどころか、そうした動機はすぐれて社会的要素によって引き起こされるものであり、すでにゴフマンは人びとに役割間隔を引き起こさせる多くの社会的要素の存していることを強調している<sup>(47)</sup>。

自分自身の役割についていかなる感情も持ち合せていないところの、ソーシャル・ワーカーにとって最も扱いにくいクライアントは、ときには内的同

47) *Ibid.*, pp. 83-152.

一性の感覚を有していたり、またときには自分自身についてのいかなる持続的な感覚も有していなかったりする。かれらはうつ病とか、精神分裂病的状態とかと診断されるかもしれない。かれらはワーカーとクライアントとのどのような心からの接触の可能性にも疑問を提起する。かれらには「誘い」は効かない。しかしながら、われわれはそのような人びとの役割問題に働きかけようと試みるまえに、まず意味ある接触の確立の困難性を考察しなければならないだろう。ラドックが指摘するように、それには実存主義的な接近方法が意味があるかもしれない<sup>(48)</sup>。もし何らかの接触が確立されうるとすれば、少なくとも一つの役割が確立されたことになるだろう。クライアントはときに「私は一人の人間としての現在あるがままの私に失望しています」というかもしれない。しかしひとたび、「私」がこうした「私自身」と接触がもたれることになるのであれば、その人は自分の失望しているパーソナリティを乗り越えたり、自分の生活の諸要素をもっと見込みのある役割に再編成したりするために援助される可能性が存するということになるだろう。

## 8. む す び に

さて、以上ラドックの著述を中心にしながら筆者なりに二、三の概念ならびに準拠枠を提示しつつ、ここまで本稿の記述の展開を試みてきたが、なにぶんにもラドックの著述は文学や哲学をはじめとしてひじょうに豊富な知識を前提にしてその記述が展開されており、またときに文章間やパラグラフ間に筆者の読解力を越えた論理的展開ないしは飛躍、あるいは不連続性がみられたりして、具体的内容の把握に極めて困難な箇所があった。したがって、本稿におけるラドックに関する解釈が完璧であるなどとは到底主張できない。このことをここに正直に白状しておく必要があるだろう。

ところで本稿に論じてきたように、ラドックは、役割概念のソーシャル・

---

48) R. Ruddock, *op. cit.*, 1969, pp. 110-111.

ワークへの導入に関して、それを主としてケースワーク活動における面接場面に応用しようとしている。しかるに一般的に言って、役割概念はこのほかにグループ・ワークやコミュニティ・オーガニゼーションなどのようなソーシャル・ワークにおけるその他の実践活動にも十分に応用することができるだろう。本稿では、この点に関して何らの記述もできなかったが、しかし本稿で展開されてきたすべての役割概念ならびに準拠枠は、そのままケースワーク以外の実践活動にも適用することが可能であることを、とくにここで改めて付言しておきたい。たとえば、反役割の組織化による一連の集団的役割行動であるソーシャル・アクションのような実践活動においては、まず人びとの動機志向的役割の把握とその合理的組織化、役割間隔の確保、新しい価値志向的役割の創造、役割選択の保障、そして役割誘導、役割逆転、および役割修正といった役割過程の分析など、これらのすべてはソーシャル・ワーカーにとって理論的ならびに実践的に極めて重要であるだろう。

いま、このように述べれば、確かに役割理論および役割概念の体系化とともに、それらがソーシャル・ワークの領域において日常実践的に応用されることの意義は極めて大きいといわなければならないだろう。しかしながらラドックとともに、われわれは現象の解釈には種々な方法があり、かつその解決方法にも種々な方法があって、役割理論はそれらのうちの一つに過ぎないこともここで十分に確認しておかなければならないだろう。このことは役割理論の発展にとってネガティブな要素であるというよりも、むしろ現象の解釈とその解決のために存する他のいくつかの理論にたいして役割理論の存在意義を肯定し、かつ明確にするものであるといえるだろう。(1974.10.10.)